

不同意の間接的発話行為に関する異文化比較研究⁽¹⁾

—日本語とアメリカ英語の場合—

白井香織

1. はじめに

異文化間コミュニケーション⁽²⁾に関わる研究は、言語学、人類学、哲学をはじめ多様な研究領域が交差する位置において様々なアプローチによって研究が行われている。その中で、言語使用に関する研究領域における理論的枠組みの一つに発話行為理論 (Austin 1962, Searle 1975) がある。発話行為理論では、発話行為⁽³⁾に着目することにより、言語の統語論上、あるいは意味論上の意味を超えた語用論的側面の記述に寄与することが可能である。さらに、この理論枠に基づく考察は、個別文化下における様々な言語使用のあり方を説明する一助となり、ひいては異文化間における人々のコミュニケーション能力の解明への貢献が期待されている。このような状況下、様々な発話行為に焦点が当てられ、第二言語習得、異文化語用論、中間言語語用論等多様な角度からの研究 (Beebe and Takahasi 1989, 橋元 1992, 生駒・志村 1993, 荒巻 1999, 末田 2000) が行われているが、「依頼」「断り」の発話行為に比べ、不同意の発話行為を分析対象とした研究は少ないことが指摘されている (王 2007)。

本稿では不同意の発話行為を分析対象とし、異文化語用論の視座から日英語の対照分析を行う⁽⁴⁾。日本語における不同意については、ポライトネス (Brown and Levinson 1987) の枠組みからの研究 (Naruse 1996)、対人配慮行動のメカニズムの観点から会話教育への示唆を試みる研究 (木山 2005)、「場面」「社会的距離」「力関係」の3要因が、

(1) 本稿は、2007年11月に名古屋大学で開催された「第25回日本英語学会ワークショップ『言語現象とコミュニケーションの相関関係について—日英ディスコース対照比較』」における口頭発表「不同意の間接表現に関する日英語対照比較」の内容に加筆・修正を加えたものである。

(2) 日本語では、「異文化コミュニケーション」という用語も用いられている。英語においては、“cross-cultural” (交差文化的, 比較文化的), “intercultural” (異文化間) の用語が用いられる。『応用言語学事典』2003. 研究社. p.384.

(3) 「言語教授およびシラバス (SYLLABAS) 編成では、発話行為は「機能」または「言語機能」と呼ばれることが多い。』『ロングマン応用言語学用語辞典』2002. 南雲堂. p.345.

(4) 異文化間コミュニケーションに対する語用論的アプローチは、以下のように定義される。「人類学、社会学、言語学、心理学と、それに領域的に深く関わっている「文化人類学」「語用論」でのアプローチでは、対人関係、社会的文脈、行動様式、価値観などと関連づけて、ことばによるコミュニケーションの本質をコンテキストの中に求めながら、異文化間コミュニケーションを研究している。特に、言語が人間関係を作り上げるための機能を持っていることに注目し、話し手と聞き手の社会関係、状況や文脈のとらえ方が同文化内のコミュニケーションと異文化間のコミュニケーションではどのように「ずれ」があるかを考察する。』『応用言語学事典』2003. 研究社. pp.261-262. なお、異文化語用論は、応用言語学の一分野とされ、対照語用論 (contrastive pragmatics) とも呼ばれる。『応用言語学事典』2003. 研究社. p.315.

不同意にどのような特徴を与えるかを考察した研究（王 2008）等がある。英語における不同意については、会話分析の手法を用いて、不同意が行われる際のターンの特徴を考察した研究（Pomerantz 1984）、ポライトネスの角度からの研究（Rees-Miller 2000）等がある。

又、対照研究としては、日本人の英語学習者と英語の母語話者（アメリカ人）の用いる英語による不同意の発話行為を、「意味公式」の枠組みから比較考察した研究（Beebe and Takahashi 1989）、談話完結テストの結果に基づき、様々な状況において用いられる日英語の不同意の特徴を考察する研究（村田 1997）、アメリカ英語によるポライトネスの方略について日本人による方略と対比させつつ考察した研究（村田 2002）、中間言語用論の観点から、日本人の英語学習者とアメリカ人英語母語話者の不同意について考察したもの（服部 2004）、日本語と中国語それぞれの母語話者が用いる不同意を、使用場面との関係から比較考察したもの（王 2007）等がある。

以上、研究の切り口、分野は異にするものの、いずれも語用論的側面における個別言語の特徴及び異言語間での差異を明らかにすること、究極的には、異なる言語文化的背景を持つ人々の間での円滑なコミュニケーションへの寄与を目的としている。

先行研究において指摘されている分析データ上の問題点としては、異なる言語間による対照研究の必要性（Naruse 1996）、討論の場面における不同意を分析対象としたものが多く、会話データを分析した研究が少ないこと（王 2007）等がある。又、考察に関しては、不同意の方略が具体的にどのように異なるのか、さらにはその違いが何故生じるのかを説明する研究の必要性が指摘されている（Beebe and Takahashi 1989）。

さらに、先行研究における主要な関心は、不同意に用いられる方略あるいは表現の詳細な記述及び区分にあり、間接的な不同意も方略の一つとして挙げられてはいるものの、それ自体に焦点を絞った考察はほとんどなされていない。日英語を含む異言語間における「依頼」「言いにくい事実の陳述」等の間接的発話行為方略の差異を調査した大規模な研究として橋元（1992）があるが、考察の中で、「当該表現に関するアドホックな意図と表現の乖離」（橋元 1992: 100）が異言語間における意図の不理解に関与している点が指摘されている。言い換えると、間接的な発話行為を行う際に、ある言語の母語話者が用いる表現の発話内容と、その発話内容によって意図されていると聞き手側が解釈する内容が、文化ごとに異なるということがミスコミュニケーションの一因として示唆されている。

上記、先行研究におけるいくつかの指摘を踏まえ、本稿では同一条件下で収録された会話データ⁽⁵⁾において生じた間接的な不同意を分析対象とし、日英語それぞれの母語話者間の会話において、間接的な不同意の発話行為が成立する際のメカニズムの一端について分析・考察する。分析及び考察の焦点は、発話行為理論（Austin 1962, Searle 1975）の枠組みにおける日英語の母語話者の用いる間接的な不同意の発話行為の成立と、その不同意の発話内容との関わりである。そこに焦点を絞ることにより、日英語による間接的な不同意の方略上の差異、及び意図の取り違い等を引き起こす要因について、発話内での情報

(5) 本稿のデータは、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）（1）[課題番号 15320054]「アジアの文化・インターアクション・言語の相互関係に関する実証的・理論的研究」（代表者 井出祥子）において2004年5月、6月にビデオ収録、文字化された。

量に関わる「会話の含意」・「量の公理」(Grice 1975)の観点から明らかにすることを目的とする。

データの詳細、間接的な不同意の定義等については2章に示す。3章では、予備的分析としての量的分析を通し、日英語における間接的な不同意に関し、その発話内容の観点から見た使用傾向を明らかにする。続く質的分析において、日英語それぞれにおいて多用されていたタイプの発話内容をもつ発話例を示し、間接的な不同意が機能する様相について、具体的に記述する。4章では、3章で示した分析結果について発話行為理論(Austin 1962, Searle 1975)、及び「会話の含意」・「量の公理」(Grice 1975)の枠組みから考察し、日英語の母語話者間で間接的な不同意の発話行為が成立する際、その発話内容、特に発話内の情報量に関する「量の公理」(Grice 1975)の観点から見て示差的な特徴が見られることを指摘する。

2. データ・「間接的な不同意」の定義

2.1 データ

本稿で分析する日英語それぞれの母語話者による会話データは、会話のコンテキストを構成する様々な要因(発話の場面・話者構成・話者の年齢・性別・話者同士の親疎関係・データ収集の場所及びデータ収録状況)を可能な限り統一して収集されている。

発話の場面は、タスクを行う場面である。タスクの内容は、2名の参加者が15枚の絵カードを並べ変えながら自然なストーリー構成になるように配列するというものである。絵カードには何人かの登場人物と様々な背景のみが描かれ、セリフ等文字による情報は記されていない。つまり、単一の正解があるわけではなく、参加者の考え方や発想、あるいは絵の内容に対する解釈次第でどのようにも物語を作ることができるようなタスクとなっている。そのため、2人の参加者の考えが一致する状況と共に、一致しない状況も自然と生起する。そのような状況においては、相手に同意するような発話と同時に、不同意する発話も用いられる。本稿では、そのような状況で生起した不同意の一つのタイプである間接的な不同意を扱う。

話者構成は、同年代にあり、立場上の上下関係も関与しない親しい間柄にある2名の女性である。2名1組のペアによってなされる個々の発話データの収録時間は、5分から8分程度に設定され、時間軸を追った談話のやり取りという観点からの分析が可能である。本稿では、上記データのうち日本語母語話者6ペア計12人、英語母語話者6ペア計12人、合計24人の発話データにおいて用いられた122例(日本語48例、英語74例)の間接的な不同意を分析対象とする。

2.2 「間接的な不同意」の定義

「間接的」(indirect)、及び「直接的」(direct)に関する定義は、Beebee and Takahasi (1989: 121)において指摘されるように、広大な研究領域に及ぶ概念である。又、「間接的発話行為の定義及び指定範囲は研究者によって微妙に異なる。」(橋元 1992: 94)。本稿では、木山(2005)による「間接的な不同意」の定義に合致したものを間接的な不同意(以下「不同意」)として分析対象とする。

「先行発話に対する不同意であることが、その発話の字義通りの意味によってではなく、会話の文脈や、話者同士が共有する背景の情報に基づいて推論することによってわかる。」(木山 2005: 170)

3. 分析

3.1 量的分析

ここでは、予備的分析として、まず、表1において、2.2で述べた不同意の定義に合致した不同意を抽出した量的分析結果を日英語の6ペアごとに示す。次に、表2において、発話内容の観点から不同意の生起頻度を分析した結果を示す。

表1 日英語母語話者6ペアごとの不同意の生起頻度(ターン数)

	日本語	英語
Pair 1	6	5
Pair 2	13	7
Pair 3	13	38
Pair 4	2	2
Pair 5	3	18
Pair 6	11	4
計	48	74

表2は、抽出した発話を、その発話内容の側面から様々な定義を立ててした分析した結果である。日英語共に、以下二つ(a・b)の発話内容に整理統合することができた。又、この二つの発話内容は、日英語共に、叙述・質問の両形式において用いられていた。

- a: 発話場面において、話し手と聞き手とが視覚情報として共有している事実(絵カードの描写内容)そのものについての叙述、質問する発話。
- b: 発話場面において、話し手と聞き手とが視覚情報として共有している事実(絵カードの描写内容)に関する話し手の解釈、あるいは聞き手の解釈や考え、及び両者の解釈や考えの妥当性等について叙述、質問する発話。

表2 発話内容ごとの生起頻度（ターン数と全体に占める割合）

	日本語	英語
a	33 (70%)	23 (30%)
b	15 (30%)	51 (70%)
計	48 (100%)	74 (100%)

（全体に占める割合は、小数点以下を四捨五入して示した）

上記、表2に示されるように、日本語母語話者間においては、aタイプの発話内容が、一方英語母語話者間では、bタイプの発話内容による不同意が、それぞれ不同意の生起数全体の70パーセントを占めていた。以上のような量的分析の結果、日英語における不同意は、その発話内容から見て使用傾向上の示差的特徴が観察された。

3.2 質的分析

ここでは、3.1における量的分析結果に基づき、日英語において生起頻度の高い傾向が見られたタイプの発話内容を持つ不同意の発話例を、叙述、質問の両発話形式ごとに例示する。例示する発話データは、トマス（2001）、木山（2005）が提示する枠組みを援用し、下記①～③に該当する部分を抽出した⁽⁶⁾。

- ① 不同意が向けられる直接的対象となる先行発話
- ② ①で述べた先行発話に向けられた不同意の発話
- ③ ②の発話が含まれるターンに隣接するターン内で、②の不同意に対する聞き手の反応を示す発話

次節においては、上記三つのターンを含む談話の流れを分析することにより、ある発話内容を持つ発話が、不同意として機能している様相を示す。従って、分析の焦点は、話し

(6) トマス（2001）は、記述文法が文法の規則を確定的なものとして扱うのに対し、語用論においては、ある発話の意味や効果を確定的なものとしてではなく、蓋然的な側面から記述することになることを指摘している。上記を踏まえた上で、語用論における論拠として以下4項目を挙げている。

1. 「ある発話の聞き手に対する発話媒介効果」
2. 「後に続く談話」
3. 「話し手による明示的な注釈」
4. 「話し手以外のだれかによる明示的な注釈」
 - ・本稿データにおいては、上記3、4は入手不可能であるため、上記1と2が含まれるよう本文中に定義した発話（①～③）を含むターンを抽出した。
 - ・データの抽出に際しては、抽出部分の前後も含め各ペアのデータ内での談話のやり取り全体を観察した上で、不同意の意図が伝達されていると判断されたものを抽出した。
 - ・例示データにおける②の不同意の発話には、下線を引いて示す。
 - ・③に後続するターンであっても、分析上必要と判断したものはそのターンまで抽出した。
 - ・例示データ左端における番号は、発話番号を示し、LとRという記号は、2人の発話参加者を示す。
 - ・データ内の文字化表記法について、右記〔は、会話中のオーバーラップを示す。

手の不同意が聞き手に受け入れられ、聞き手が自らの考えを変更したかどうか等に関わらず、ある発話内容を持つ不同意の意図が、聞き手に伝達されているかどうかにかかれる。

3.2.1 日英語において多用される傾向のあった発話内容のタイプの発話例

3.2.1.1 日本語母語話者による発話例

主要な発話内容：2人の発話参加者が目の前で共有している視覚情報としての絵カード内の描写事実そのものをそのまま言語化して述べる、あるいは描写事実について簡略な質問を行う。

例. (J 1)

発話形式：statement

- 01 L：戻って、えー ① 先行発話
02 R：戻って、でも戻る方向だったら、なんか、これだよね。 ② 不同意
03 L：ん、
04 L：あ、ほんとだ ③ 聞き手の反応

上記場面では、(01)においてLが、絵カードの登場人物の動きについての考えを述べている。それに続く(02)において、Rは、(01)においてLが述べた考えに同意しかけ、「戻って」と発話し始めるが、続く「でも」で始まる発話において、戻る方向が描かれたカードを指摘し、(01) Lの発話内容に対する不同意を行っている。その発話により、(04)におけるLは、(02) Rの発話の含意、つまり(01)においてLが述べた考えが妥当ではないことに気づき、「あ、ほんとだ」という発話を行っている。

例. (J 2)

発話形式：yes-no question

- 01 L：三つの話な気がするよね。 ① 先行発話
02 R：だよ [ー
03 L： [んー

04 R：三つの話でちょうどよくないみたいな感じだよ。
05 R：あ、でもさでもさ＝
06 L： =うん
07 R：これだ、ここ乗せて、こう来てんじゃん
08 L：うん、
09 R：これで、なんかつぶれてない？ ② 不同意
10 L：あ、ほんと、それ、あ、そうか。 ③ 聞き手の反応

上記場面において、(01) Lが、物語に三つの展開があるように思えるという考えを述

べている。その考えに対し、(09) Rは、絵カードの中の描写事実について質問することにより不同意を行っている。この発話によって(10) Lは、(09) Rの発話の含意、つまり、Lが(01)において述べた考えが妥当ではないことに気づき「あ、そうか」という発話を行っている。

例. (J 3)

発話形式：wh-question

- 01 R：あ、違う、これが先かな。 ① 先行発話
02 L：これなにー？ ② 不同意
03 R：あ、違う、これがこう、これはこういう繋がりかな、だ [よね
③ 聞き手の反応
04 L： [うん

上記場面において、(01) Rは、「これ」と指示している絵カードが先に配列されるのではないかという自らの考えを述べている。それに対し、(02) Lは、Lが「これ」と指示する絵カード、あるいはその描写内容について質問を行いつつ不同意を行っている。その発話により、(03) Rは、(02) Lの発話の含意、つまり(01)においてRが述べた、絵カードの配列について考えが妥当でないことに気づき、(01) Rで述べたものとは異なる意見へと変更している。

3.2.1.2 英語母語話者による発話例

主要な発話内容：2人の発話参加者が目の前で共有している視覚情報としての絵カード内の描写事実に関して、発話者自身が考えた解釈、発想、登場人物のセリフ等を述べる。あるいは、ストーリー展開の妥当性、説明可能性に関する質問を行う。

例. (E 1)

発話形式：statement

- 01 R：Oh, that's it okay, so I [say... ① 先行発話
02 L： [I feel like there's something missing, because I
feel like he should be talking to him at some point, so that they can get
over to this. ② 不同意
03 R：Yeah, but see, what *I'm thinking* is...so he's walking along, he can't get
across, he walks back and he meet's that guy. ③ 聞き手の反応

上記場面において、(01) Rはストーリー展開に関する自らの考えに納得した上でさらに意見を述べようとしている。その発話を遮るように始まる(02) Lにおいて、Lは、自分の考える別のストーリー展開（絵の中の登場人物である“he”が、別の登場人物“him”

とどこかの時点で話をして、その結果二人が（絵の中の）“this”と指示される場所へ行き着いているように思えるので、（話の展開上）何かが欠けている気がする。）を述べることで、(01) Rが、考えをさらに展開させようとしていることに対し不同意を行っている。その(02) Lの発話により(03) RはLの含意、つまりLが別の考えを持っており、Rの考えに同意しかねていることに気づいている。そして、(03) Rにおいて、Lの考えも一旦受け入れつつ、さらに自分の考えるストーリー展開をより具体的に述べている。

例. (E 2)

発話形式：yes-no question

- 01 L : And he's sad. ① 先行発話
02 R : It looks about right? Right? You think the sections connect? ② 不同意
03 L : Okay, so... okay, so let's go over this one [more time. ③ 聞き手の反応
04 R [Right.

上記場面において、(01) Lは、絵カードに描かれた登場人物“he”の表情もしくは感情について、自らの解釈を述べている。その考えに対し、(02) Rは、そのように考えることで“the sections”と指示される部分のカード配列及びストーリー展開が上手く行くかどうかを質問することで、不同意を行っている。その発話により、(03) Lは、(02) Rの含意、つまりRが(01) Lに同意していないことに気づき、もう一度一緒に考え直す姿勢を示している。

例. (E 3)

発話形式：wh-question

- 01 R : Here he asks the yellow one for help. ① 先行発話
02 L : Yeah. But then, why would he be walking in this direction here?
03 L : And then, this direction here? ② 不同意
04 R : Oh! that would be this one... he wonders... he's like what - - ponders how he's going to go across the cliff... he turns back, this is where he meets the yellow gu [y. ③ 聞き手の反応
05 L : [oh, right, right, okay.
06 R : Oh, that makes sense.
07 L : Yeah, that makes sense.

上記場面において、(01) Rが、自らの考えるストーリー展開を述べている。それに対し、(02-03) Lは、(01) Rの考えを受け入れる上で、納得の行かない点（登場人物“he”が歩いている方向）について質問をすることで不同意を行っている。その発話によって、R(04)は、(02-03) Lの含意、つまりRの考えに同意できていないことに気づき、Lの質

問に対し詳細に答えている。

3.3 分析結果のまとめ

以上、不同意の発話をその前後に生起している発話と共に例示し、日英語において質的に異なる内容を持つ発話が、それぞれに不同意として機能している様相を示した。4章において、不同意の発話内容に焦点を絞り、日英語において不同意の発話行為が成立するメカニズムを、発話行為理論 (Austin 1962, Searle 1975)、及び「会話の含意」・「量の公理」(Grice 1975) の枠組みから考察する。

4. 考察

ここでは、4.2における考察に先立ち、4.1において、考察で用いる理論的枠組みと、主要な概念の定義 (cf. ロングマン応用言語学用語辞典 2002, 応用言語学事典 2003) を示す。

4.1 発話行為理論・会話の含意

発話行為理論 (Austin 1962, Searle 1975) においては、発話には、発語的意味 (命題的意味) と、発語内の力 (発語内的意味) の二つの意味があるとされる。そして、その両方の意味を持つ発話を発話行為と呼ぶ。二つの意味は、それぞれ発話行為、発語内行為に対応し、人が発話する時、その二つの行為が同時に成立し、その結果として、聞き手に対し発語媒介行為が成立するとされる。中でも、間接的に遂行される発話行為は間接的発話行為と呼ばれる。

- ① 発話行為：一定の意味と指示機能を持つ文を発すること。

発語的意味 (命題的意味)：これは発話を含む特定の語や構造によって伝えられる発話の基本的な文字通りの意味。

- ② 発語内行為：その文を発することで、その文と結びついている「要請」「提案」「依頼」「不同意」等の発語内の力を行使すること。

発語内の力 (発語内的意味)：これは発話や書記テキストが読み手や聞き手に及ぼす影響。

- ③ 会話の含意 (conversational implicature)

慣習的に決まっている意味ではなく、その場その場の状況において発語内行為をきめるキメ手となるような言外の意味 (毛利 1992: 110)。話し手は、会話中に意味を言い含めるために量の公理、質の公理、関係の公理、様態の公理から成る「会話の公理」(Conversational Maxims) を用いるとされる (ロングマン応用言語学用語辞典 2002: 83)。

又、「会話の含意」や「会話の公理」の前提となっているのは、「協調の原理」(Cooperative Principle) (Grice 1975) である。この原理は、「話し手が何らかの発話行為を行う際、聞き手がその字義通りの意味をもとに、話し手の意図を理解する枠組みを与え、会話の参加者の相互理解の基盤を提供する体系」(応用言語学事典 2003: 204) とされる。例えば、「暑いなあ。」という発話は、以下のように記述される。

- ① 発語的意味：話し手の身体的状態（暑いと感じていること）を述べている。
- ② 発語内の力：(発話の状況により様々な意味を持ち得るが) 例えば、エアコンの温度設定をもう少し下げてほしいという「要請」として、あるいは、「プールに行こうよ」という「提案」として意図される等の場合が考えられる。

⇒ 文字通りには①の意味を持つ発話によって、会話の含意（発語内行為が成立するキメ手となる言外の意味）が聞き手に伝達され、要請あるいは提案等の発語内行為が成立している。

以下4.2では、3章において示した不同意の発話例それぞれ自体に焦点を絞り、本節で示した分析枠から考察する。

4.2.1 日本語母語話者に多く見られたタイプの発話例

1. statement

戻る方向だったら、なんか、これだよな。

2. yes-no question

何かつぶれてない？

3. wh-question

これなにー？

- ① 発語的意味：statement (叙述) 形式の発話例においては、「これ」と指示される絵カードに、「戻る方向」が描かれているという事実を述べている。
question (質問) 形式の発話例においては、絵カードの描写事実そのもの（「つぶれてない？」「なに？」）を質問する発話を行っている。
- ② 発語内の力：ある内容が描かれた特定の絵カードの存在を指摘する叙述、あるいは絵カードの描写内容それ自体を問う質問を行うことで、先行発話に対する不同意が意図されている。

⇒ 文字通りには①の意味を持つ発話によって、会話の含意が聞き手に伝達され、不同意の発語内行為が成立している。

4.2.2 英語母語話者に多く見られたタイプの不同意の発話例

1. statement

I feel like there's something missing, because I feel like he should be talking to him at some point, so that they can get over to this.

2. yes-no question

It looks about right? Right? You think the sections connect?

3. wh-question

But, then, why would he be walking in this direction here? And then, this direction here?

- ① 発語的意味：statement（叙述）形式の発話例においては，“he”と指示される絵カード内の登場人物が，ある時点で“him”と指示される別の登場人物と話をしているように思えるので，ストーリー展開上何かが欠けているような気がする，という話し手の考えを述べている。
question（質問）形式の発話例においては，“the sections”と指示される部分がストーリー展開上正しく繋がるのかどうか，又，絵の中の“he”と指示される登場人物が，何故“in this direction”に向かっているのかについて，相手の解釈・考えを聞くための質問を行っている。
- ② 発語内の力：ストーリー展開に関する話し手の考えを述べる発話によって，あるいはストーリーを展開する上での説明の可能性や妥当性を問う発話によって不同意が意図されている。

⇒ 文字通りには，①の意味を持つ発話によって，会話の含意が聞き手に伝達され，不同意の発語内行為が成立している。

4.3 考察のまとめ

以下は，日英語母語話者による不同意の発話行為成立のメカニズムを，不同意における主要な発話内容，発話行為理論（Austin 1962, Searle 1975），及び「会話の含意」・「量の公理」（Grice 1975）の観点から考察した結果である。

表3 考察結果のまとめ：不同意の発話行為成立のメカニズム

	日本語母語話者	英語母語話者
「会話の含意」の観点から見た発話行為の成立メカニズム	発話場面において、話し手と聞き手とが視覚情報として共有している事実（絵カードの描写内容）そのものについて、叙述あるいは質問をすることにより、会話の含意が聞き手に伝達され、不同意の発話行為が成立する。	発話場面において、話し手と聞き手とが視覚情報として共有している事実（絵カードの描写内容）に関して、話し手の解釈や考えを叙述したり、聞き手の解釈や考えの妥当性について質問したりすることにより会話の含意が聞き手に伝達され、不同意の発話行為が成立する。
「量の公理」の観点から見た発話内の情報	発話場面において、話し手が聞き手と共有している事実（絵カードの描写内容）そのものについての叙述、質問。	発話場面において、話し手が、聞き手と共有している事実（絵カードの描写内容）に関する自らの解釈や考えを叙述、又、その事実に関する聞き手の解釈や考えの妥当性についての質問。

上記表3に示されたように、日英語の母語話者の用いる不同意の発話行為成立のための方略は、その発話内容上において、示差的な違いが指摘された。Beebe and Takahashi (1989) は、日本人の英語学習者と英語母語話者の用いる不同意を比較し、両者が用いる不同意の発話内容上の違い、特に質問形式における発話内容上の違いが十分わかっていないことに言及している。本稿では、特に間接的な不同意を取り上げ、質問形式についても分析を行ったが、その結果を見る限り、不同意をする際に、日英語の母語話者が考える「求められる情報としての過不足ない情報量」(Grice 1975)が、両者間では異なっており、それが意図の取り違えを引き起こす一因となっている可能性が指摘される。

又、橋元 (1992) では、日英語を含む複数の言語における「依頼」の発話行為に関する調査結果が示されているが、日英語に関し、本研究結果との傾向上の共通点が指摘される。橋元 (1992) は、依頼の発話行為を行う際、日本語母語話者は、「前提となる事実理由の陳述を行う」、英語母語話者は、「相手の心理についての質問」という方略を最も多く用いるとしている。発話行為の分類 (Searle 1976: 11) において、「不同意」は「依頼」と同様、自分の考えに合わせて相手に何かをさせる働きを持つ「指示」(directive) の発話行為にあたる。つまり、「指示」の発話行為をする際、日本語母語話者は、「前提となる事実」に重きを置き、英語母語話者は、相手の心理 (考え) に重きを置くという共通性が見られる。

5. まとめ

本稿では、日英語それぞれの母語話者間で不同意の発話行為が成立するメカニズムの一端について、分析・考察を行った。分析を通し、日英語の母語話者は、叙述あるいは質問形式において不同意を行う点は共通していたが、その発話内容において使用傾向上の差異が明らかになった。続く考察においては、日英語における不同意の発話行為の成立に関し、会話の含意が伝達されるための量の公理 (Grice 1975) の枠組みにおいて差異が指摘された。日本人母語話者間では、発話参加者間で共有している (視覚) 事実そのものについて叙述・質問を行うことにより会話の含意を伝え、不同意の発話行為が成立していた。一方、英語母語話者間においては、発話参加者間で共有している事実に関し、お互いの考えを叙述する、あるいは相手の考えの妥当性等について質問を行うことにより会話の含意を伝え、不同意の発話行為が成立していた。つまり、不同意を行う際、できるだけ間接的で婉曲な表現を用いて相手に対する配慮を示そうとする姿勢は日英語共通である。ただ、どのような発話内容によっていかにして間接的な意図、つまり会話の含意を伝えるのか、その点において差異が見られた。

最後に、本研究における分析・考察結果に関し、データ及び語用論の研究手法ゆえの限界があることを断っておきたい。まず、データに関しては、発話参加者数、及び参加者がすべて女性であること等、分析データ上の偏りは否めない。又、分析については、実際に使用される言語を、その使用場面に関わる多種多様な要因とともに記述するという語用論の性格上、いくつもの解釈や記述がなされ得る。例えば、参加者が共同で物語を作るというタスクを行う際、どのように振舞うことが期待され、よしとされるのかという社会文化的前提としてのフレーム (cf. Tannen 1993, Watanabe 1993) 等いくつかの別の要因を絡めた記述も可能である。本稿での分析・考察およびその結果は、本研究で得られたデータの範囲において、本稿で用いた特定の分析枠の中で、日英語それぞれの母語話者が不同意をする際のメカニズムの一端について記述を行ったものである。今後より多くのデータ、分析枠及び多様な方法論による研究が期待される。

参考文献

- 荒卷朋子. 1999. アメリカ人と日本人の断り表現の比較. 『長崎大学留学生センター紀要』 7. 105-137.
- Austin, John. I. 1962. *How to Do Things with Words*. Oxford: Oxford University Press. [坂本百大訳. 『言語と行為』 2001. 大修館.]
- Beebe, Leslie M. and Tomoko Takahasi. 1989. Do you have a bag? Social status and patterned variation in second language acquisition. In S. Gass, C. Madden, D. Preston, L. Selinker (eds.) *Variation in Second language acquisition Vol.1: Discourse and pragmatics*. Philadelphia: Multilingual Matters LTD. 103-125.
- Brown, Penelope and Stephan C. Levinson. 1987. *Politeness: some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Grice, H. Paul. 1975. Logic and Conversation. In P. Cole and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech acts*. New York/ San Francisco/ London: Academic Press. 41-58.
- 橋元良明. 1992. 間接発話行為方略に関する異言語間比較. 『日本語学』 vol.11. 92-101.
- 服部幹雄. 2004. 不同意の発話行為における中間言語語用論. 『名古屋女子大学紀要』 50. 231-236.
- 生駒知子・志村明彦. 1993. 英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー；「断り」という発話行為について. 『日本語教育』 79号. 41-52.
- 木山幸子. 2005. 日本語の雑談における不同意の様相—会話教育への示唆—, 宇佐美まゆみ編. 『言語情報学研究報告』 6. 165-182.
- ロングマン応用言語学用語辞典. 2002. 南雲堂. (山崎真稔・高崎貞雄・佐藤久美子・日野信行訳)
- 毛利 可信. 1992. 英語の語用論. 大修館.
- 村田和代. 1997. 同意・不同意にみられるていねいさ (politeness). 『人間文化研究科年報』 第13号. 37-47.
- 村田 和代. 2002. やわらかい明瞭さ—アメリカ英語のポライトネスの一側面について—. 『龍谷紀要』 24巻第1号. 39-52.
- Naruse, Mari. 1996. Disagreement Strategies in Japanese. 『研究紀要』 第29号. 97-110.
- 応用言語学事典. 2003. 研究社.
- 王 萌. 2007. 不同意の表明の仕方—日中の対照を中心に. 『比較社会文化研究』 22. 13-22.
- 王 萌. 2008. 日本人の不同意表明の仕方(1). 『比較社会文化研究』 23. 13-21.
- Pomerantz, Anita. 1984. Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn shapes. In M. Atkinson and J. Heritage (eds.) *Structures of social action*. Cambridge: Cambridge University Press. 57-101.
- Rees-Miller, J. 2000. Power, severity, and context in disagreement. *Journal of pragmatics* 32. 1087-1111.
- 笹川洋子. 1994. 異文化間に見られる「丁寧さのルール」. 『異文化間教育』 8. 44-58.
- Searle, John. 1975. Indirect speech acts. In P. Cole and J. Morgan (eds.) *Syntax and semantics 3: Speech acts*. New York/San Francisco/London: Academic Press. 59-82.
- . 1976. A classification of illocutionary acts. *Language in society* 5. 1-23.
- 末田美香子. 2000. 初対面場面における不同意表明と調整のストラテジー. 『日本語教育論集』 16. 23-46.
- Tannen, Deborah. 1993. What's in a frame? Surface evidence for underlying expectations. In Tannen, Deborah (ed.) *Framing in discourse*. Oxford: Oxford University press. 14-56.
- トマス・ジェニー. 2001. 『語用論入門—話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』 研究社. 田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真理共訳)
- Watanabe, Suwako. 1993. Cultural difference in framing. In Tannen, Deborah ed. *Framing in Discourse*. Oxford: Oxford University Press. 176-209.

– Abstract –

This study, from a viewpoint of cross-cultural pragmatics, investigates the difference between the mechanisms used for indirect speech acts of disagreement by native speakers of Japanese and English by focusing on the contents of utterances of disagreement under the framework of “speech act theory” (Austin 1962; Searle 1975) and “conversational implicature” (Grice 1975). Through the investigation, this study claims that the distinctive difference of indirect speech acts of disagreement between Japanese and English speakers is evident in the contents of utterances of disagreement, in terms of “quantity” of “Conversational Maxims” (Grice 1975). Japanese native speakers tend to communicate their “conversational implicature” (Grice 1975) of disagreement by mentioning or asking about simple perceptible facts shared in their conversational situations. Native English speakers, however, rather convey their “conversational implicature” (Grice 1975) of disagreement by stating or asking about their thoughts or opinions they have not shared in their conversational situations.

〔抄 録〕

本稿では、異文化語用論の観点から、日英語の母語話者による不同意の間接的発話行為成立のメカニズムがどのように異なるのかについて、「発話行為論」(Austin 1962; Searle 1975) 及び「会話の含意」(Grice 1975)の枠組みにおいて、不同意の発話内容に焦点を絞った考察を行う。考察を通し、日英語の母語話者による不同意の間接的発話行為における示差的な違いが、「会話の公理」(Grice 1975)における「量」(Grice 1975)の観点から見た発話内容において顕著であることを指摘する。日本語母語話者は、発話の場面において聞き手と共有している知覚可能な事実について言及、あるいは質問することによって、不同意の会話の含意を伝達する傾向がある。それに対し、英語の母語話者は、発話の場面において聞き手と共有していない自らの考えや意見について叙述、あるいは質問することによって不同意の「会話の含意」(Grice 1975)を伝えることが多い。